

戦時下の口演童話に見られる国策協力の検討
—金沢嘉市による防空教育の話材を事例として—

中 村 美和子*

A Study of Japanese-Style Storytelling for Children, 'Kōen Dowa'
Under the National Policy During the War in the Showa Period:
A Storytelling Script for Aerial Defence Education Written by KANAZAWA Kaichi

NAKAMURA Miwako

Abstract

This study reveals an aspect of activities of Japanese-style storytelling for children, 'kōen dowa'. Kōen dowa is characterised by large audiences and performances using gestures. Many performers of kōen dowa followed the approach to national policy during the war in the Showa period (especially 1941-1945). The purposes of this paper are: (1) to analyse how the storytelling department of Nippon Shokokumin Bunka Kyokai (The National Association for Young Childrens' Culture) came to follow the national policy line during the war in the Showa period, and (2) to observe the type of educational policies contained in a storytelling script of aerial defence education written by KANAZAWA Kaichi (1908-1986). By organising articles on activities of the storytelling department in the newsletters of Nippon Shokokumin Bunka Kyokai, it was found that the department had changed by degrees to positively propagate the approach to national policy. Through analysing an educational script on aerial defence, it was found that a nationally held ideal image of young children and youth groups was presented.

Keywords : 'kōen dowa' (Japanese-style storytelling), national policy, KANAZAWA Kaichi, 'Nippon Shokokumin Bunka Kyokai', aerial defence

1. はじめに

アジア・太平洋戦争下の児童文化による国策協力の研究では、紙芝居に着実な蓄積がある¹。国策紙芝居の資料整理が進み、展示や実演、講座など研究成果の社会的還元の良い機会も増えた²。だが、「児童文化の代表的な形で普及してきた」³ 口演童話に関し、国策協力のありようを明らかにした研究はほとんど見受けられない。本稿では、その点に着目する。

口演童話とは読まれる童話と区別される話す童話で⁴、口演童話が「職業的な分野にもちこまれたのは、明治30年代に、巖谷小波による書かれた童話の実演運動がはじまってから」⁵だといわれ、発展の過程で多くの童話家を輩出した。子どもの集団を相手とするため、聴覚的な技術としての音声・口調・表現から決まる語調、視覚的な技術としての表情と身ぶりが求められた⁶。こうした特徴から理解される通り、語られた場かぎりの口演童話は無形文化財であって、紙芝居のように資料が残らない。録音・録画が一般的な時代ではなく台本が常に用意されたわけでもなかったため、研究の対象と方法にはおのずから制約がある。

キーワード：口演童話、国策、金沢嘉市、日本少国民文化協会、防空

*平成26年度生 人間発達科学専攻

周知のように、口演童話、紙芝居を含む児童文化の諸団体は、情報局の統制により社団法人日本少国民文化協会（以下「少文協」）に一元化された。少文協は1941（昭和16）年12月に創立、翌1942（昭和17）年2月の紀元節に発会し、設立趣意として国民学校外の生活における「少国民の心性の陶冶、情操の涵養、性格の形成」への協力が謳われた⁷。子どもの文化によって校外での少国民育成を図ることが、組織的な使命とされたのである。

11部会に編成された協会の『役員名簿』によれば⁸、現在「童話作家」と呼ばれる坪田譲治、浜田広介、小川未明は文学部会に名を連ねた。一方、童話部会は幹事長の久留島武彦をはじめとし、安部梧堂、内山憲尚、榎葉勇、岸辺福雄、原勝、松美佐雄といった口演童話家がほとんどを占め、当該部会が口演童話分野の集まりであったと分かる。

口演童話の人気も手伝い、童話部会には少文協成立当初から特別な期待が寄せられた。それは、二つの事例に明らかである。一つは1942（昭和17）年の発会式当日、久留島が東宮仮御所に召されて皇太子と5人の親王に謹話した事実⁹、いま一つは、童話人だけではなく、「農山漁村の炉端の老媪の話も、託児所の保姆さんの話も、国民学校の先生がたのお話も全部ひつくるめての童話でなければならぬ」¹⁰という認識のもと、正しい童話の姿、童話界の姿として、童話を語る活動が一般に広く浸透したうに専門化された芸能としての口演童話が成立する構図が部会で想定されていたことである¹¹。

本研究では、アジア・太平洋戦争下で皇族に愛好され庶民層への普及が期待された口演童話による国策協力が、具体的にはどう求められ、どのように展開したのかを童話部会の動向に焦点を当てて検討していく。同部会の活動と変遷については、『日本少国民文化協会報』（以下『会報』）を利用して整理する¹²。そして、具体的な話材の分析には童話台本「闘ふドイツ少年」¹³を取り上げる。同作は機関誌『少国民文化』¹⁴に掲載されたもので、題名から直接に戦意高揚の意図が伝わり、機関誌の目次に「防空話材」と記載されたこともあって国策への積極的な協力がうかがえる。加えて、作者の金沢嘉市（1908-1986）は同作発表時に小学校教師として、また童話部会幹事として、国策協力をになう期待の大きい立場にあったという意味でも注目される。したがって、童話部会の動向を整理し、「闘ふドイツ少年」掲載までの背景を探ったうえで内容を分析すれば、戦時に求められた国家的課題「少国民の心性の陶冶、情操の涵養、性格の形成」への少文協の対応、口演童話にどのように国策協力の具体的内容が盛り込まれたのかを明らかにしていけるものと考えられる。

金沢は東京府青山師範学校（現東京学芸大学）に学び、昭和時代に小学校教師として活躍した。1938（昭和13）年に結成された教室童話研究会¹⁵において童話の語りを理論的に探究し、児童文化に関わる教師たちのリーダーとして注目される。金沢の教室童話は子どもの人間形成を意図した「教育としての童話」の語りであり、それは子どもの発達に配慮ある形式的なりズム、感情をこめた台詞といった技術に支えられた¹⁶。金沢は「私と口演童話」で戦時協力を回想し、少文協発行誌に「ドイツの少年が空襲のとき勇氣ある行動をした記事を書いたことがあった」と記した¹⁷。金沢旧蔵の教育資料、原稿などを整理し金沢嘉市著作集¹⁸の制作を支えた上地ちづ子は、童話台本「闘ふドイツ少年」で空襲時の少年の勇姿が語られた例を示し、「口演童話は、その特性を生かして子どもたちの戦意を鼓舞したのだ」¹⁹と指摘する。上地はまた、口演童話が「紙芝居や人形劇よりもずっと簡便で野戦的であり、大きな活躍をもたらしたにちがいない」²⁰と、戦争協力の貢献度の高さを推察する。本研究での童話部会の活動整理、台本分析は、上地の推察を検証する試みである。

口演童話の戦争協力を網羅的に把握できる一次資料、たとえば金沢が参加した教室童話研究会で実施していたという疎開先への慰問日誌のような記録は存在を確認できない。わずかに浅岡靖央が、学会の口頭発表資料として日米開戦後の「靖国の子招待童話大会」プログラムほかを提示し、児童文化運動の年表項目に教室童話研究会の学童疎開地向け話材集の発行を記した²¹。資料発掘に課題のある口演童話について、国策協力の影響力、内実を総体的に検証することはむずかしい。この現況を考えたとき、『会報』による童話部会の動向の整理、「闘ふドイツ少年」の背景の確認、そして台本に含まれる戦争協力の要素を検討することは、戦時下の口演童話のありようを知るうえで有意だと言えよう。

つづく第2章では、少文協童話部会の活動の展開にどのような国策協力が見られるのかを整理する。第3章では、はじめに金沢の台本制作の動機となった新聞記事の調査について述べ、次に、同台本に含まれる戦争協力の要素を検討する。

2. 日本少国民文化協会童話部会の活動と国策協力

本章では少文協童話部会の活動の整理から国策協力への取り組みを探り、防空話材制作の背景を押さえる。まず、下表1の通り、『会報』掲載の童話部会関連の記事数に当たった。

表1 『日本少国民文化協会報』掲載の童話部会関連の記事数

号数	1号	2号	3号	4号	5号	6号	7号	8号	9号	10号	11号	12号	13号	14号
発行年月日	1942 11.15	1942 12.15	1943 1.15	1943 2.15	欠号	1943 5.15	1943 6.15	1943 7.15	1943 8.15	1943 9.15	1943 11.15	欠号	欠号	1944 2.15
記事数	4	3	2	3		3	1	5	8	12	5			8
協会報総ページ	8	8	8	8		8	6	6	6	8	4			4

滑川道夫監修による復刻版『少国民文化 第八巻「資料編」(社団法人日本少国民文化協会関係資料)』(1991年、エムティ出版)をもとに作成

表1では、用紙統制の影響と思われるページ数減少の傾向にあつて、8号以降、童話部会の記事数は増加したことがうかがえる。次に表2において、『会報』における童話部会関連記事から少文協人事、少文協主催行事への出席、童話部会幹事会などの記事を除き、主な項目を整理した。表1で1件として計上した記事の中には、複数日の活動、あるいは一日複数回の活動も含まれるが、表2によって、記事数のみでは十分につかめない童話部会の活動機会の増加傾向が把握できる。さらに、読み取り可能な点として、(1)活動の種類は、①講習会の講師、②協会行事での童話実演、③童話理論の研究と寄稿、④地方支部、学生組織の支援、⑤新作話材の提供と話材発

表2 『日本少国民文化協会報』掲載の童話部会関連記事の主な項目

掲載号	実施日・掲載日など	主な項目
1号	1942(昭和17)年 11月28・29日	「童話部会東京錬成講習会」於：京橋区泰明国民学校。 東京府と隣接県の会員300余人が参集。
2号	1942(昭和17)年 12月15日	協会員に対する「童話話材募集」開始(〆切は翌月31日)。
4号	1943(昭和18)年 1月27日-2月1日	「少国民文化講習会」に久留島幹事長が出講。1月27・28日に富山、1月29・30日に金沢、1月31日・2月1日に福井で開催。
	1943(昭和18)年 2月7日	「新潟少国民文化推進座談会」に樫葉勇が参加。午前中に新潟童話会幹事、国民学校訓導、地元事業家らと懇談。午後には県立図書館で童話、紙芝居実演。
6号	1943(昭和18)年 4月10日	「口演童話家と童話作家との研究会」於：社会事業会館(虎ノ門)。童話部会から幹事や相談役、文学部会から幹事長、会員など約40人の参加。
	1943(昭和18)年 5月15日	特集記事「決戦下の童話のあり方」。宮下正美、上沢謙二、松美佐雄、奈良島知堂の寄稿掲載。
7号	1943(昭和18)年 5月22・23日	「決戦下幼児文化協議会」於：社会事業会館。「幼児の生活と文化」「遊具」「絵本」「童話」「紙芝居」「音楽」「防空と服装」「文化施設と指導者」について提案者より報告、陸軍中佐の講演。537人の参集。
8号	1943(昭和18)年 7月10日	学生の童話挺身の壮行会。於：社会事業会館。戦時食糧確保の運動へ協力のため、大学生・師範学校生ら150人の童話行脚(7月16日から9月中旬)出発に際し、原勝の話材2編の実演発表。久留島幹事長、新井太郎より激励。
	1943(昭和18)年 7月15日	「昭和18年度 童話部会事業計画」発表 1、錬成に関する事項：(1)中堅会員錬成会 8月中旬 養生館、(2)会員現地錬成会 9月中一日入営、(3)全会員錬成会(童話講座)月1回 第一徴兵講堂 2、現下即応童話態勢確立に関する事項：(1)少国民輔導非常対策研究委員会(空襲対処)、(2)決戦下生活確立に関する各種運動研究委員会(食糧増産運動等) 3、童話の理論探求に関する事項：(1)童話専門委員会 月1回以上、(2)他部会との連絡協力研究会 月1回以上 4、話材の充実向上に関する事項：(1)優秀話材選定委員会 月1回以上 5、童話実践面の充実昂揚に関する事項：(1)一般童話研究会 月1回以上、(2)学校童話研究会 月1回以上、(3)幼児童話研究会 月1回以上、(4)環境対象に即応する各種童話研究会 随時、(5)公開童話会 毎月1回 第一徴兵講堂、(6)童話部会挺身隊結成 地方各種会場挺身 6、童話普及面の充実昂揚に関する事項：(1)地域的職域的指導階層に対する講習会 随時 各地公会堂、学校

中村 戦時下の口演童話に見られる国策協力の検討

	1943 (昭和18) 年 7月17日	「海行く少国民大会」於：神田共立講堂。20日の海の記念日に先立ち、海事の普及と昂揚を意図し、少国民に海洋へ雄飛する志を植えつける目的で他団体と共催。金沢嘉市が幻灯「海行く少年」の説明。少国民3000人参集。 ※協会報10号に大阪、名古屋、金沢ほか6都市でも盛会の記事。
9号	1943 (昭和18) 年 8月10日	「幼児防空対策研究会」(会場不明)。5月開催「決戦下幼児文化協議会」での防空問題の討議者を中心に「平素に於ける準備対策」、「防空警報発令時対策」、「空襲後の対策」の原案作成。童話、紙芝居、童謡、遊戯の生産を勧奨。
	1943 (昭和18) 年 8月15日	協会員に対する「童話講座受講者申込受付」。9月から翌年3月の毎月第3土曜夜に開講予定で、講座終了後は各方面への派遣、童話指導者の資格付与。
	1943 (昭和18) 年 8月15日	告知「童話講師の派遣、斡旋」。町会青少年部、隣組子ども常会ほかの童話の活発な利用を受け、協会が講師人選、派遣を事業化。
10号	1943 (昭和18) 年 9月11日	「航空童話材 文学童話合同研究会」於：芝区南桜国民学校。9月20日航空記念日前後に全国展開の航空思想普及啓発運動の一環。少年飛行兵大量獲得用の口演童話、童話文学作品を公表前に研究。航空青少年隊ほか500人参集。
	1943 (昭和18) 年 9月15日	告知「童話部会の決戦即応」。食糧増産、戦意昂揚など直接に戦力増強に役立つ主題を重点的に取り上げていくよう、事業計画の全面切り替えをし、「戦ふ童話講座」、「戦ふ童話講習会」、「戦ふ童話研究会」を予定との案内。 ※10号には、協会の定款変更が9月8日より実施された記事あり。
	1943 (昭和18) 年 9月15日	留岡よし子の防空対策実演幼児童話「ハイハイうさ子ちゃん」掲載。
	1943 (昭和18) 年 10月31日	「実演童話研究会」於：築地国民学校。浅田嘉雄、長島武雄、大学・専門学校学生の実演につづき批評。
	1943 (昭和18) 年 12月15日	告知「戦ふ童話講座」。久留島幹事長による講演「戦ふ童話の姿」。
11号	1943 (昭和18) 年 10月2日	「軍事援護童話研究会」於：京橋区鉄砲洲国民学校。太田博庸「握り飯の義人」、荒井貢次郎「栗の木の下の方会」実演と批評。聴衆300人、会員30人。
	1943 (昭和18) 年 10月7日	「幼児防空童話研究会」於：京橋区和光幼稚園。留岡よし子、山田巖雄、上沢謙二の実演と批評。聴衆100人、会員30人。
	1943 (昭和18) 年 10月9日	「幼児防空対策研究会」於：社会事業会館。10月7日「幼児防空対策資料」公表を受けて開催。あいさつ、研究発表等あと留岡よし子、山田巖雄、上沢謙二の童話実演と防空音楽、防空紙芝居。定員400人のところ600人参集。 ※14日に第二次研究会を急ぎ開催の運び。
	1943 (昭和18) 年 10月14日	「幼児防空対策研究会 第二次」於：社会事業会館。山田巖雄「黒ちゃんねづみ」の聴衆300人。
	1943 (昭和18) 年 10月16日	「戦ふ童話講座」於：第一徴兵保険講堂。杉本少佐から少国民文化に対する軍の希望の講話。聴衆80人。
	1943 (昭和18) 年 11月20日	告知「戦ふ童話講座」於：第一徴兵保険講堂。「明治以後戦時下に発生せし童話と今後の動向」講師：藤沢衛彦。
	1943 (昭和18) 年 11月21日	告知「実演童話研究会」於：田原国民学校(浅草)。金沢嘉市、上沢謙二の実演予定。
14号	1944 (昭和19) 年 1月15日	「決戦幼児童話研究会」於：四谷区幼稚園。50人の会員、園児約150人の参加。原勝ら3人の実演、批評。
	1944 (昭和19) 年 1月15日	「決戦童話講座」於：第一徴兵保険講堂。60人参加。久留島幹事長、新井の講演。金沢ほかの意見。
	1944 (昭和19) 年 1月16日	「童話勉強会」於：本郷区真砂国民学校。30人参加。幹事の原、鈴木の指導による朗読などの研究。
	1944 (昭和19) 年 1月16日	上の勉強会のあと「決戦童話研究会」於：真砂国民学校。久留島幹事長、岸辺相談役ほか50人。少国民50人。宮下正美、川崎大治、伊藤義和の実演。
	1944 (昭和19) 年 1月22日	「決戦幼児文化講座」於：社会事業会館。6回連続講座の第1回に内山憲尚が講演。聴講者260人。
	1944 (昭和19) 年 1月23日	「決戦童話研究会」於：向島第三寺島国民学校。40人参加。少国民30人。三堀一延、伊東拳位、岡川典治の実演。
	1944 (昭和19) 年 2月	告知「2月の予定」として童話挺身隊、決戦童話講座など6件。

『日本少国民文化協会報』1号(1942年11月)～14号(1944年2月)[滑川道夫監修による復刻版『少国民文化第八巻「資料編」(社団法人日本少国民文化協会関係資料)』(1991年、エムティ出版)所収]をもとに作成。政策課題への対応を示す部分に下線を付した。

掘、⑥協会行事への参加、(2)下線を付した通り、食糧確保・増産運動、空襲対処・防空対策、海事の普及と昂揚、航空思想普及啓発、軍事援護など政策課題への対応、という2点がある。

表1と表2から、「闘ふドイツ少年」制作の背景を押さえると、童話部会の活動機会が増加傾向にあったこと、童話部会の貢献として新作話材が時局、政策の求めに応じて提供されたこと、航空思想普及から考えられる通り航空戦が戦局の課題となり、幼児防空対策で明らかな通り、将来の少国民たる幼児の防空、つまり将来の兵力や銃後の生産者たる子どもの防空が童話部会の課題として焦点化されていったことが挙げられる。

1943（昭和18）年5月22・23日に少文協主催の決戦下幼児文化協議会で「防空と服装」報告があったことを受け、8月10日には幼児防空対策研究会が設けられる。ここでは、「平素に於ける準備対策」として心構えを作る童話、紙芝居、童謡、遊戯の生産が求められた。こうした要請に加え、少文協が9月8日に「決戦即応態勢」として定款の部分的変更を実施したことを受け、童話部会は、『会報』10号の記事「童話部会の決戦即応」で、「直接戦力増強に役立つ少国民文化の一翼としての童話に突進する」²²と事業計画の切り替えを宣言する。この種の宣言は『会報』の中で童話部会だけに見られるもので、同部会の国策協力体制が少文協で中心的位置にあったと分かる。さらに少文協は、9月11日制定、10月1日施行の「学校防空指針」と同じ時期に、内務省防空局の指導で「幼児防空対策資料」を作成する。同資料公表当日の10月7日には幼児防空童話研究会で口演童話作品の検討がおこなわれ、10月9日に少文協主催の幼児防空対策研究会で童話実演の本番を迎える。

少文協と童話部会の国策協力の流れに沿い、「闘ふドイツ少年」は1943（昭和18）年11月発刊『少国民文化』2巻11号に高学年向け話材として掲載された。同作は、大人が不在の空襲時に、年長の子どもの年少の子どもをかばって避難する内容である。童話部幹事であった金沢が防空の心構えのために話材を提供し、立場上の責務を果たしたと言えよう。

『少国民文化』2巻11号は少文協の活動情報や編集後記を含む本文全80ページからなり、特集「防空と決戦少国民」が66ページを占める。特集内容は「幼児防空対策資料」と解説、陸軍省防衛課少佐への少国民防護に関する聞き取り、文部事務官による学校防空の要領に関する寄稿など防空に対する指導方針、指導内容が多く、児童文化財は金沢の童話台本3ページと防空紙芝居脚本6ページに限られる²³。

3. 防空話材「闘ふドイツ少年」の検討

(1) 制作のもととなった新聞記事について

「闘ふドイツ少年」の附記には、「七月頃の朝日新聞『戦ふドイツ少国民』及び『戦ふイタリヤ少国民』を材料としたもの」、「防空に関する注意事項等を話す前、又は後に話して、防空に対する積極的な意志を培ふことにしたいと思ふ」²⁴とある。だが、『朝日新聞戦前紙面データベース「昭和30年～40年」』²⁵の7月分朝刊、夕刊を確認したところ該当する記事は存在しなかった。そこで6月分を調査したところ、まず1943（昭和18）年6月27日付夕刊1面に、見出し「盟邦ドイツの学徒総動員」として16-17歳のドイツ少国民の日常生活と、総力戦へ向けた協力の様子を紹介するというリードの記事があり、「徹底した防空教育」という小見出しが含まれると判明した。記事に当たると、登校時の集団行動と少年団、学校での防空訓練に関する内容が含まれており、「闘ふドイツ少年」との一致を見た。さらに、同年6月28日付朝刊1面には見出し「戦ふイタリヤ少国民」の記事があり、「闘ふドイツ少年」の結びにある登場者フリック少年の発話のもととなったと思われる「鉄砲を下さい、それでイギリスの兵隊を射つてイタリアの仇をとりたいんだ」という言葉も確認できた。よって、二つの記事が童話台本の材料とされた可能性がきわめて高いと判断できる。次に、二つの記事を参照し、「闘ふドイツ少年」を抄出して分析をおこなう。

(2) 台本に含まれる国策協力の要素の検討

台本の物語は前半の集団下校の場面、後半の病院の場面に分かれる。前半に対応する新聞記事は、見出し「盟邦ドイツの学徒総動員」中の小見出し「徹底した防空教育」につづく最初の箇所である。

まづ六歳、七歳の一年生は昔ならば母親の手にでも引かれて甘へながら学校まで見送られ、また帰りにはそれぞれ迎へに来てもらったものだが、総力戦の今日では、父親は戦線へ、母親は軍需工場へといった家庭

が多く、したがって子供達も何時までも甘へてはみられない、子供達は颯爽と『自口』して、三人、四人と近所の子供たちを誘ひ合せて団結して学校へゆく²⁶

従軍や軍需動員で親の手が回らず、子どもだけで集団登校することが分かるが、登校の様子はくわしく描かれてはいない。一方、金沢の童話台本の前半は13625字で、もとにした新聞記事165字分の8倍強になっており、集団下校途中で発生した空襲を中心にした物語が創作されている。台本の冒頭は次の通りである。

東にも西にも南にも敵をひかへ堂々と激戦を展開してゐるドイツは前線も銃後ありません。殊に最近の様に敵の空襲がだんだん激しくなつて来た今日では国内もすつかり戦場となり全国民はヒットラー総統のもとに完全に戦闘配置についてゐます。

中でもドイツ少年団はかうした時にこそいよいよその面目をあらはし立派に闘ひ抜いてゐます。その一例として先日ベルリン空襲の時のことをお話し致します²⁷。

同盟国ドイツの逼迫した戦況と国民の様子を簡潔にまとめ、空襲時のドイツ少年団のエピソードへと注意をうながす語り出しである。つづきは以下の通りである。

恰度その日は土曜日でみんな一緒に家へ帰ることが出来ました。十三になる少年団班長フリツクは自分の班員十二名をつれ先頭にたつて歩いてゐました。みんな二列にきちんと並び足並そろへて班長のあとをついてゐます。そして副班長のワルターが一番後をしつかりと守り列がみだれると時々注意してゐます。煉瓦の敷きつめられた赤い道を右に折れると班長フリツクは「止れ。」の号令をかけました。そこは交差点です。間もなく班長の右手がさつと高くあがり、「進め。」の号令で立派にならんだ列は道を横ぎりしました²⁸。

ここには、班長・副班長の的確な号令・合図にしたがう模範的な集団（登）下校の指導が含まれる。このあと空襲警報が出て緊張が走るなか、班長フリツクが「登校又は帰宅の途中で空襲警報が発令された場合」の三つの条項「一、学校に近かつたならば学校へ。一、家に近かつたならば家へ。一、若しその余裕のない時は付近民家の待避所へ」を思い浮かべ、家に急ぐ判断を下す。この条項は、特集「防空と決戦少国民」への東京都防衛局長寄稿「都市防空と少国民防護」中の「五、児童の防護 空襲警報発令ありたる場合」の記述と内容が一致する。該当部分を以下に引く。

下校の途中で発令ありたる場合は家に近い時は直に其の場より帰宅し待避所に待避し、家に遠き場合は学校が近ければ学校に引返し教職員の指示を受けしめ、其の他の場合は一時附近の家の待避所又は公共待避所に待避し、その後の状況により警防団員、警察官、其の他の係員の指示をまち速かに帰宅せしむる²⁹。

台本には、新聞記事とは別に、空襲警報発令時の東京都の行動指針が主人公の回想として組み込まれている。児童文化財を通し、子どもたちに防空の心構えを培うように求められた協会員たちには、機関誌の掲載記事に関する情報が前もって提供されたことであろう。

次に、前半の残り部分のあらすじをまとめ、分析をおこなう。

「五、六年の上級生は一、二年生の手を引いて行きます。足もとに気をつけて、駆足……進め。」³⁰とフリツクが号令をかけ、足の不自由な子を背負う。子どもたちが走ると敵機の爆音がしたために近くの待避壕に年少の者から順に入り、フリツクが全員の待避を見届けると轟音がする。敵機が去ると、道や建物が壊れている。壕に入らなかったフリツクが倒れていて、呼んでも応えない。副班長が待避壕に班員たちを戻し、救護所へ向かう。

この部分から読み取られる指導内容は、年長者が年少者や障がいのある者に配慮すること、あせらずすみやかに行動すること、敵機が去っても念のために安全を確保すること、被害者が出た場合、一人が救護を求めに行くことである。

台本の前半から抽出された指導は、防空への意志の育成という金沢の意図に沿う。加えて、班単位でリーダー

の指導や規律を尊重する必要、年少者や障がい者への配慮、緊急時における沈着冷静な判断の大切さなど、防空目的以外でも集団行動を必要とする場面に応用可能、かつ子どもの発達を見すえた教育的内容が含まれていると把握できる。

ところで、台本の附記には「少年団については日本的な動かし方をして見た」³¹とある。大日本少年団は、「学級組織と異なり上級の者も下級の者もあるから、兄貴分は弟達をいたはり、指導し、弟分は兄貴達を敬ひ服従し、その指導を受ける」³²という、集団登下校ほか校外生活の活動単位である。少年団は国民学校を単位とし、少年団員は初等科第3学年以上、「校下区域を数分団に分けて編成」³³された。訓練には防空訓練が盛り込まれ、上級団員の誘導法に重きが置かれた³⁴。こうした少年団理論から、「闘ふドイツ少年」の前半部分は少年団中心の校外生活の理念を伝え、上級団員のリーダーシップを表現したと言える。

次に台本の後半部分を検討する。まず対応する新聞記事だが、見出し「戦ふイタリア少国民」中の小見出し「国のため死ぬ喜び」に含まれる挿話が該当する。該当部分を引く。

すなはち今年二月ミラノ爆撃で廃墟の中から息も絶え絶えの一少年が掘り出されたが「僕はかうして国のために死ぬるのは嬉しい」と叫んで皆を沸かした、これはアルバニア戦で戦死した一大尉を父に持ち、この時の空襲では、兄弟六人全部が爆死を遂げた悲劇の中の一人で、フェルナンド・ジヨヴァネリといふ一三歳の少年であつた

ナポリでは一少女が「私はギルの一員だから決してこはいとは思はない」と、爆弾で重傷した手術をうけた、またこれもシチリアで爆弾の破片を四つも身にうけて瀕死の狼の子団の団員は最近シチリアを訪問した党書記長の見舞ひをうけ、何か欲しいものがあつたらと聞かれると「鉄砲を下さい、それでイギリスの兵隊を射つてイタリアの仇をとりたいんだ」といふ名答弁をやつている³⁵

この323字分の情報から創作された金沢の台本の後半は1444字で、次の通り始まる。

やがて病院に運ばれた班長は救護班の人や急いでかけつけて来られたお母さん等にかこまれた中で漸く目をひらくと、急に

「みんなは、みんなは、どうした。足の悪いマクスは」と叫び出しました。[中略]

「気がついてよかつた。では手術にとりかゝりませう。爆弾の破片が入つてゐるから少し傷は痛いかも知れんが、がまんをして下さい。」

と医者に云はれると、フリツクは少しびつくりしましたが、すぐ気を取り直して、

「はい、大丈夫です。僕はドイツ少年団員です。決して怖くはありません。お願いです。どうぞ手術をして下さい。」³⁶

後半は、フリツクの言動が中心である。意識を取り戻して班員たちの安否を気づかい、緊急手術に動じず、母親、医療者たちへ配慮を示す。さらにドイツ少年団員として誇りを持ち、積極的に手術を受ける。前半につづき、班長、少国民の理想的なありかたが示される。後半の残り部分についても以下に筋をまとめ、分析をおこなう。

フリツクは40分以上におよぶ手術を「ドイツの少年だ」と言いながら耐えぬく。数日後、街の少年団長が見舞いとねぎらいに訪れた際、最後まで班員の指揮をとれなかった点を詫げる。何かほしいものはないかと団長にきかれると、敵をうつ鉄砲がほしいと訴える。

ここでも、責任感の強さ、報償に武器を欲する愛国心の表れなど、模範的な姿勢が観察できる。特に強調されているのは捨て身の愛国心、勇気、戦意で、新聞記事の少年少女3人の言動が班長フリツクの一連の言動に反映されている。

4. おわりに

『会報』掲載記事の整理から、童話部会が戦力増強の国策に役立つ主題を積極的に取り上げ、少文協において中心的役割をはたすようになった経過が明らかになった。その事例として、防空話材「闘ふドイツ少年」を検討した。子どもたちに防空の心構えと行動、愛国心などを身につけさせるには、注意事項の言い聞かせでは現実感に乏しく、子どもたちの状況把握や適切な行動の理解はおぼつかない。どういう事態にどう行動するかを物語で提供すれば、実践へ向けた子どもたちのより深い理解に結びつく。この点について、口演童話という児童文化財が到達していた技術の高さと特徴に効果が期待されていた。

技術の高さとは、班長、班員、母親といった身近な登場者の設定、集団登校や母子の会話といった日常的な場面設定の具体性とわかりやすさであり、有事の緊張感、登場者のいさぎよい言葉づかいに象徴される臨場感である。これらは、子ども集団を相手にする紙芝居にも共通するが、口演童話の特徴は、「実演者が直接子どもに接するだけに、その人の人格や容姿、動作、話術などが、子どもの心に影響を及ぼす」³⁷点であり、絵を見せる紙芝居と異なり、一度に数百人単位を対象にできる点である。例えば、国民学校を単位とした少年団を相手に、一堂に集団登下校の指導、防空教育が可能であり、物資の不足した時代に用具も不要であった。口演童話が機能的な国策の情報伝達手段、教育技術だったことが事例の分析によって理解され、上地の指摘した「大きな活躍」を裏づける内容が見られた。

次にもう一つ指摘できることとして、戦時下における望ましい少国民像が話材で提示されていた点が挙げられる。「闘ふドイツ少年」では、少年団を中心にした校外生活を舞台として、模範的な班長、副班長、班員たちの行動と内面が表現された。台前半では、空襲時の具体的な行動、防空への意志といった指導内容を中心に集団行動のありよう、集団行動を必要とする社会に応用できる人間像が打ち出されていた。後半でも重ねて自分の属す集団への貢献意識、国策への対応に求められる愛国心、勇気、戦意がテーマ化されていた。ここで改めて、少文協「設立趣意書」を振りかえり、国民学校における教育をおぎなうものとして「少国民の心性の陶冶、情操の涵養、性格の形成」が謳われていた点から考察すると、童話台本「闘ふドイツ少年」は防空への意志の育成を意図した教材として生命を守る国策に沿うばかりではなく、時局に求められた少国民・成人の国民に発達してもらいたいという意図が全体として反映され、戦争協力の貢献度がきわめて高い。同じ掲載誌に所収された紙芝居作品³⁸には少年飛行兵への憧れ、防火・防空の注意が含まれるが、それらを登場者たちに直接語らせる表現形式は、子どもの発達への意図が全体を貫くテーマとして収斂されているとは言いがたい。紙芝居は画面に合った展開が必要で、言葉の情報量が多いと筋が十分に収斂されない制約がある。一方、「闘ふドイツ少年」での設定、物語展開、注意事項をはじめとした情報の表現、テーマの一貫性などは、口演童話の特徴と、それに依拠した教育的活用が十分に研究されたものであり、研究成果の充実として結論づけられよう。その充実が、国策協力の期待に対し、高い効果を発揮したことと推測される。

本研究においては、防空に関する注意事項の理解、防空への積極的な意志の育成を目的とした、小学校教師による防空教育用の台本を分析した。アジア・太平洋戦争下を対象とすれば、残された口演童話の台本に量的な限りはあるが、複数の存在が確認できる。それらに当たり、口演童話の表現技術とそれが支えた「心性の陶冶、情操の涵養、性格の形成」の意図を探れば、話者である大人から聞き手である子どもたちへ、どのような教えと伝承があったのかを具体的に明らかにしていける。口演童話という児童文化財の話材の分析を通し、童話の語りと国家主義の関係をさらに解き明かしていくことを今後の課題としたい。

【註】

1. 櫻本富雄・今野敏彦、1985『紙芝居と戦争——銃後の子どもたち』マルジュ社；山本武利、2000『紙芝居——街角のメディア』吉川弘文館；森山優、2013「戦時・占領期印刷紙芝居目録」『国際関係・比較文化研究』11(2)、静岡県立大学国際関係学部、pp.485-501など。
2. すみだ郷土文化資料館「特集展示・国策紙芝居とすみだ」(2013年5月3日－8月25日)、神奈川大学非文字資料研究センター・神奈川大学図書館「戦時下大衆メディアとしての紙芝居——国策紙芝居とはなにか」(2013年11月27日－12月20日；会期中に実演、公開研究会)、子どもの文化研究所「戦後70年・戦争と紙芝居展」(2015年8月20日－23日；会期中に実演、講座)など。

3. 内山憲尚、1972「口演童話」滑川道夫・菅忠道編『近代日本の児童文化』新評論、p.164
4. 童話という語は昨今ではもっぱら幼童向け文学を指し、口演童話は1960年代に欧米から本格的に導入されたストーリーテリングとともに「おはなし」「素話」と呼ばれる機会が多いが、前掲「口演童話」によれば、「大正年間、昭和初期には『童話』と言えば口演童話のことを意味し、大衆童話を指した」（内山、1972、p.165）。
5. 中山茂、1970『児童文化』朝倉書店、p.89
6. 中山、1970、前掲書、p.92
7. 社団法人日本少国民文化協会、[発行年不明] 1991「設立趣意書・定款並諸規程」滑川道夫監修『少国民文化 第八巻「資料編」（社団法人日本少国民文化協会関係資料）』エムティ出版、p.2
8. 11部会とは文学、絵画、童話、遊具、紙芝居、演劇、映画、舞踊、音楽、蓄音器レコード、出版。『役員名簿』（初版 1942）は滑川監修、1991、前掲書所収。
9. 滑川監修、1991、前掲書所収『日本少国民文化協会報』2号（初版 1942）に記載あり。
10. 新井太郎、[1942] 1991「童話部会の方針と実際運動」『日本少国民文化協会報』1号。滑川監修、1991、前掲書所収。
11. 新井、[1942] 1991、前掲
12. 発行は1号（1942（昭和17）年11月）-14号（1944（昭和19）年2月）。ただし、滑川道夫監修による1991年刊の復刻版『少国民文化 第八巻「資料編」（社団法人日本少国民文化協会関係資料）』エムティ出版では、5・12・13号が欠号。協会報1号1面では発行編集兼印刷人の小野俊一が、月刊『少国民文化』は「会員外の一般世人に広く売出す月刊雑誌」とし、協会報を「会員同志間の心と心とのつながりをつける機関」としている。
13. 金沢嘉市、1943「闘ふドイツ少年」『少国民文化』2(11)、pp.52-54；滑川道夫監修、1991『少国民文化 第五巻』エムティ出版再録。
14. 1942（昭和17）年6月の創刊から1944（昭和19）年12月までに全30巻を刊行。少文協に一種類のみ機関誌の刊行が許可され、少国民文化の指導、啓蒙、宣伝の要素を合わせもつ月刊誌として一般に向け販売された。
15. 青山師範学校童話部で活躍していた河合徳司らと結成（金沢嘉市著作集編集委員会編、1989『金沢嘉市の仕事 1 児童文化とともに』あゆみ出版、p.30）
16. 金沢の教室童話の特徴については、中村美和子、2017「教室童話が意図した〈教育としての童話〉の語り——金沢嘉市の童話台本の分析から」『子ども社会研究』23、pp.133-151に詳しい。
17. 金沢嘉市、1985「私と口演童話」野村純一・佐藤涼子・江森隆子編『ストーリーテリング』弘文堂、p.77
18. 金沢嘉市著作集編集委員会編、1988-1989『金沢嘉市の仕事』全5巻別巻1巻、あゆみ出版
19. 上地ちづ子、1997、日本児童文学学会編『研究=日本の児童文学2 児童文学の思想史・社会史』東京書籍、p.190。なお、上地の言う口演童話の特性とは、同書p.174において久留島武彦『通俗雄弁術』（1916）を引き、音声やジェスチャーによる口演効果に触れていることから、音声、ジェスチャーが示唆されていると取れる。
20. 上地、1997、前掲、p.191
21. 浅岡靖央、2007「青山師範学校出身者による児童文化運動——戦中期において都市小学校教員が届けた児童文化」発表用資料④-1、日本児童文学学会第46回研究大会
22. 社団法人日本少国民文化協会、1943「童話部会の決戦即応」『日本少国民文化協会報』10号。滑川監修、1991、前掲書に所収。
23. 小貫武雄作・金子士朗絵『勝ち抜く力』（大日本画劇株式会社製作）。製作会社のほか「日本少国民文化協会選定」という記載があるため出版物の転載と分かるが、初版年は不明。内容は、学徒動員で飛行隊に合格した青年と子どもたちの交流、空襲時の防火活動の大切さ、防空壕の利用のしかたなど。
24. 金沢、1943、前掲、p.54
25. 朝日新聞社電子電波メディア本部編、2002『CD-ROM 朝日新聞戦前紙面データベース「昭和30年～40年」』朝日新聞社
26. 朝日新聞1943年（昭和18）6月27日付夕刊。引用文中の『自口』は判読不明。
27. 金沢、1943、前掲、p.52
28. 金沢、1943、前掲、p.52
29. 谷川昇、1943「都市防空と少国民防護」『少国民文化』2(11)、p.11；滑川道夫監修、1991『少国民文化 第五巻』エムティ出版再録。
30. 金沢、1943、前掲、p.52
31. 金沢、1943、前掲、p.54
32. 大沼直輔、[1944] 1991『少年団とその錬成』近代日本青年期教育叢書・Ⅲ期17巻、日本図書センター、p.43
33. 大沼、[1944] 1991、前掲書、pp.63-64
34. 大沼、[1944] 1991、前掲書、pp.31-32
35. 朝日新聞1943（昭和18）年6月28日付朝刊。文中のギルはGioventù Italiana del Littorio（リットリオ青年団）。
36. 金沢、1943、前掲、pp.53-54
37. 中山、1970、前掲書、p.91
38. 小貫武雄作・金子士朗絵、出版年不明、前掲作品